春の足音は鎮魂曲

ドラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の足音は鎮魂曲

【Ｎコード】

Ｎ３０５５Ｙ

【作者名】

ドラ

【あらすじ】

４年前の事件によって死んだ2人の男と女。再びあの頃の仲間が集まった時、事件の意外な真相が明らかになる。北海道の小さな村を舞台に生命の尊厳を謳う青春小説。

序章

序章

「もう3年になるんだな」
「そうですね」
北海道雪白村。自分の生まれ育った土地に戻ってきたのに頭に浮かぶのは一つ、あの日死んだ一人の友人ーいや、そう思っているのは自分だけだろうか。あいつから見れば自分はー。
「どうだ。もう気持ちの整理はついた頃か？」
恩師である深沢利治とは駅で待ち合わせる約束だった。お互いに几帳面な性格だから再会は約束の時間の３０分以上前になった。
「そうですね。完全に吹っ切れたと言えば嘘になりますが・・・」
「あれは誰の責任でもない。しかしさすがに早く来過ぎたな。バスが来るまで1時間以上あるぞ」
じゃあ、約束通り来ても３０分以上待つ事になってたじゃないか。そう思ったが口には出さなかった。
ここ雪白駅からバスで２０分ほど行った場所にある墓地。そこが俺達の目指す最初の場所だった。俺、賀川荒太にとって一番大切な女性と彼女の命を奪った男ーいや、そう思っているのは自分だけだろう。そうに違いないーの墓参りから済ませておこうというのが深沢先生の提案だった。
「時間が止まってるみたいですね。この村は。ファミレスもコンビニもないなんて東京じゃ考えられない」荒太はそう言って苦笑した。
「卒業して東京に行ってどうだい？都会での暮らしは？」
「刺激があっていいですよ。もともと夢持って上京したんですから。ちょっと寒いですね。駅の中入りませんか？少しはマシでしょう」
「それもそうだな。ああ、そういえば今日、北条君も来るぞ。君には言ってなかったけどな」

「えっ？本当ですか？代表して俺と先生の２人で行くって聞いてましたけど」
北条敦也は同じ弓道部のエースだった男である。ちなみに自分は部長で深沢先生は週に１度だけ練習を見に来てくれるコーチのような存在だった。
「私もそのつもりだったんだがね。あまりぞろぞろ行くのもどうかと思うからな。まあ、１秒でも早く君に会いたかったんじゃないかな。絆ってのは遠くはなれても簡単に壊れたりしないもんだよ。君らは親友だったからな。おっ、噂をすればだよ」
先生の指差した方を見ると確かにそれらしき人物が近付いてきていた。一応、黒系統の服装だがかしこまった様子ではない。それは荒太も同じ事だが。
「うおー、敦也ー、久しぶりー」
「イエーイ」
なぜかハイタッチから始まる２人。
「てか、お前、すげー髪だな。さすがに東京行ってバンドやってるだけの事はあるな」
敦也の言う通り荒太は髪を真っ金金通り越して銀髪に染めている。そして東京でバンドやってプロを目指してる。
「でも、それ以外は変わってないな。いやあ、懐かしい」
「お互い様だろう」そう言って笑ったあとで今、気が付いたかのように「あっ、先生もお久しぶりです」
「うん、本当に君は何も変わってないみたいだな」先生は目を細めてそう言った。
「ところで２人ともいつからここにいるんですか？俺も２０分前は早過ぎたかと思ったのに」
「１０分以上前からいる」
「でもバスが来るまではまだ５０分以上あるらしいぞ」
「えっ、じゃあ約束通りに来ても３０分以上待つ事になってたじゃないですか」こいつは口に出した！

「君の遅刻を計算に入れてるんだよ。いつもは時間にルーズなくせになんで今日に限って」
「それはやっぱり荒太に１秒でも早く会いにーって雪降ってきましたねタクシーで行きませんか？５０分も待ってたら荒太が凍死しますよ。北海道の寒さからはかけ離れた場所から来たんですから」東京だって冬は寒いのだが一応の優しさは示してくれた。昔からそういう奴だった。若干、恩着せがましい所も変わってない。
「まあ、そうだね。先生、タクシーで行きましょう」そう言うと先生も頷いた。見た目は若く見えるが先生ももう６０過ぎだ。
「それにしても卒業してから3年、蓮井さんが死んでから４年になるのか。ちょうど今頃、２月頃だったからな」敦也がそう言うと３人の間にしばしの沈黙が流れた。
　後悔の念が強い分、荒太にとっての青春は苦い思い出になってしまっている。でも忘れてはいけない。覚えていなければいけないのだ。
「あの頃の比奈子の支えに自分はなれてなかったんだなって、そう思うと墓参りする気にはなれなかった。あいつに合わす顔がないって」
「多分、そう思ってんのお前だけじゃねえぞ。ほら、タクシー来たぞ。あれ乗ってこ」
　粉雪が辺りにちらつく中、俺達は蓮井比奈子と彼女が「殺した」男の眠る墓地へ向かった。

第1章－1

第1章

1

比奈子とは幼稚園からの付き合いだった。最初は家が近かったという理由からの家族ぐるみの付き合いだったが小学校に入学する頃には純粋に友達として仲良くなっていた。

比奈子はもともと大人しいタイプの女の子で1人で絵を描いたり本を読んだりするのが好きな奴だった。かと言って友達が少なかったわけではなく、むしろ誰からでも好かれていた。ただ大勢で騒がしくするのが苦手だっただけだ。

荒太も小学生の頃はそういうタイプだった。音楽好きだった両親の影響で幼い頃からピアノを習わされていた。「されていた」と言っても嫌々やらされていたわけではない。荒太自身、「音楽」という色も形もない芸術に不思議な魅力を感じていた。

ただ小学生ともなれば自然に男子と女子の間に垣根はできてくる。2人とも幼稚園の頃のように一緒に遊んだりお喋りしたりといったような事は少なくなっていた。

ちなみに関係ないが―いや、関係あるか―比奈子は美少女だった。かくいう荒太もなかなかのルックスだったのだが、いかんせん運動が苦手だったので女子にはモテなかった。勉強はできるのに不公平だと荒太は思っていたが、そのぐらいの年代だと勉強ができるよりスポーツが得意なほうがモテる。

そんな荒太と比奈子だが5年生のクラス替えで初めて同じクラスになった。2人の関係は良好だった。昨日見たテレビがどうだとか最近読んだ本がどうだとか聴いたCDがどうだとかの雑談はたびたびした。まだ異性として特別な感情はなかったと思うがお互いに大切な存在だったとははっきりと言える。

中学に入ると比奈子は美術部に、荒太は科学部に入った。別に科学に興味があったわけではないが特に他にやりたい事があったわけでもなかったので入部した。こういうと科学部に失礼な気もするが実際そういう理由でやってた人はたくさんいた。

その代わり荒太の中で音楽というものへの情熱は異様なほど高まっていた。きっかけは中2で同じクラスになった友達のその友達のお兄さんが文化祭でライブをやるから一緒に見に行かないかと誘われた事だった。

その友達の友達の兄、略して友友兄は高校の軽音部でかなり派手なバンドをやっていた。名前を言えば誰でも知っているであろうバンドのコピーが中心だったがなかなかハイレベルなライブだった。

荒太はこれだ―いや、これしかないっと思った。ロックである。ギターをかき鳴らしながらシャウトする友友兄こそが自分の理想像だと。

即行でエレキギターを購入した2万くらいの安物だったが中学2年にしては大きな買い物だった。

「俺、ギターがんばるよ。ピアノも好きだけどこっちの方が合ってる気がする」両親にはそう言った。特別、反対はされなかった。別に本気でプロのピアニストにさせたかったわけでもないらしい。

比奈子のほうはというとこれはもう天才としか言いようがない。こちらは本気で画家を目指してもらいたいくらいいろんなコンクールで様々な賞を総なめしていた。

2人とも脇目もふらず信じた道を突き進んでいればよかったのかもしれない。そうすればあんな「事件」を起こす事もなかった。

第1章ー2

2

高校受験はそれほど苦しかったという記憶はない。

「荒ちゃんも雪白高校受けるの？」

比奈子は荒太の事を「荒ちゃん」と呼ぶ。幼馴染なのだから別に不思議な事ではないし荒太自身、中性的な顔立ちだったからしっくりくる呼び方だった。

雪白高校は地元では有名な進学校である。2人共通っている塾は違ったが成績は優秀なほうだったので自然な選択だった。ちなみに友友兄も雪白高校の卒業生だった。自分とは3コ上にあたる。工業系の標準以上の偏差値の大学に進んだらしい。

北条敦也と出会ったのはちょうど部活を引退して塾に通い始めた頃だった。たまたま隣の席に座ったというだけだがなんだか最初から気が合った。敦也は中学の頃から弓道部だったらしい。荒太の中学には弓道部が無かったので敦也は物珍しい存在に思えた。

「賀川君も雪白高校受けるんだろう？だったら一緒に弓道やろうぜ」そう言うと敦也は弓道という競技の魅力を熱く語り始めた。最初はなんとなく聞いていた荒太だったがだんだん興味が沸いてきた。そもそもクラブ活動なんて物は勉強以外で努力できるフィールドが欲しい人がやる物でそれがサッカー部だろうが軽音部だろうが弓道部だろうが関係ないのだ。自分の青春は音楽6、勉強2、弓道2くらいになるのではないかと漠然と設計し始めていた。

しかし偶然というのはおかしな物でこれと全く同じ事が比奈子の身にも起きていたのだ。

「比奈ちゃんも雪白高校受けるんでしょ？だったら一緒に弓道やろうよ」そう言ったのは滝川紗紀という荒太達とも敦也とも違う中学に通っていた女子である。運動嫌いな比奈子も弓引くくらいならできるかもと興味を持ったらしい。こちらは弓道6、勉強2、絵2く

らいだろうと想定した。
「絵が６じゃないのか？」と荒太は聞いたが「私、絵は１人で自由に描くほうが好きだから」とは当時の比奈子の弁。
かくして４人とも見事、雪白高校に合格し波乱万丈な青春時代が始まる次第である。

第1章ー3

3

高校生活が始まったばかりのピカピカの1年生に待ち受けているのが部活の勧誘である。もっとも荒太にとっては軽音部と弓道部にしか興味がなかったのでまず手始めに軽音部の見学に行った。が、若干、期待を裏切られた感はあった。第一にレベルが低い。荒太は中2からギターを始めたわけだが明らかに3年生のそれより自分のほうが上手い。第二に先輩方、みなさんオリジナルでやってる人がいなかった。もちろん練習としてやるならコピーは重要だし趣味としてやるならコピーだけでも十分だろうが荒太はできればオリジナル中心のバンドが組みたかった。実際、荒太には中学時代から書き溜めたレパートリーが20曲ほどあった。まあ、自分から誘えば乗ってくる人もいるだろうと考えて入部するかどうかは一旦保留にした。

翌日は弓道部に体験入部。弓道という競技は最初から的に向かって打たせてもらえるわけではないという事は敦也から聞いていた。まずは巻藁という藁を束ねた物に向かって打つ練習から始める。巻藁は射場に4つ用意されていたがそこには敦也と比奈子の姿もあった。彼らは昨日も来ていたらしい。

「これが上手くできるようにならないと的前には立たせてもらえないらしいよ。テストに合格しないとだめなんだって」他にも体験入部に来ている人は10人ほどいて自分の番を待ちながら比奈子はそう言った。それも敦也から聞いていた。もっとも経験者である敦也と比奈子の友達だという滝川紗紀はすぐに合格する事になるのだが。

「どうする？荒ちゃん入る？」帰りのバスの中で比奈子が聞いてきた。

「うーん、とりあえず入ってみてつまんなそうだったら辞める。今んとこおもしろそうだとは思わないけど」曖昧に答えたつもりだっ

たが「そうだよねえ。私もそんな感じだなあ」と比奈子も頷いた。
ちなみに比奈子は一応、美術部も覗いてみたらしい。だが雪白高校はもともと文化部が盛んでなく美術部もいかにも地味な女子４名しかいなかった。それでも中学時代、数々の賞を根こそぎ受賞した比奈子の雷名は彼女らの耳にも届いていたようで熱烈に入部を懇願されたそうだ。もっとも比奈子は「私、絵は１人で描くほうが好きなので」と荒太に語ったのと同じ理由でやんわりと断ったらしい。
２、３回の体験入部で結局２人とも弓道部に入部した。軽音部のほうは入らない事にしたが１人だけ趣味が合いそうな奴がいたのでそいつとは仲良くなった。名前は大津圭一といって荒太は「パトス」というバンドが好きだったのだがその大津君も大ファンだったらしくすぐに意気投合したわけである。ちなみに大津君のほうは軽音部にも喜び勇んで入部した。「だってバンドやってりゃモテるじゃん」とはっきり言われた時は荒太も苦笑するしかなかった。
一方、先輩達から聞いた話では雪白高校の弓道部はかなりの強豪らしい。知らずに入部した荒太もどうかと思うが実際、全国大会にも何度も出場してる常連校なんだそうだ。そのため普段の練習もかなり緊張感のあるものだった。敦也も最初のうちは少し戸惑っているように見えた。というのも中学時代の敦也の所属していた弓道部は世間一般でいう卓球部的存在でどちらかと言えば地味で馬鹿にされる部だった。実際、真剣に弓道に取り組んでいたのは自分だけだったと敦也は愚痴をこぼしていた事がある。それだけに高校での弓道部生活はやりがいのあるものになりそうだと嬉々と語っていた。
比奈子のほうもなんだかんだと言いながら弓道という競技にハマっていた。１ヶ月程で巻藁テストに合格すると練習が終わった後も残って滝川さんと共に１時間ほど矢を打ちまくっていた。
弓道を少しでもかじった事のある人ならわかると思うがこれがなかなか残酷な競技なのである。まず過程と結果が悲惨なほど比例しない。普通どんな競技でも練習すればするだけある程度は上達するものである。だが弓道にはそれがない。それほど練習しなくても当て

まくる人もいる。逆に人一倍、練習してもそれほどの成果が得られない人もいる。比奈子は確実に後者だったが実は意外に性根が負けず嫌いなのである。「努力は必ず報われる」と信じて疑わない奴なのである。

肝心の荒太はというと弓道を楽しんではいなかった。それはそうか。遊びでやってるわけではないのだから楽しくはなくても当然だ。その代わり音楽のほうは楽しくて仕方なかった。じゃあ、音楽は遊びだったのかと言えばそうでもない。というか何事も真剣にやったほうが楽しいものだ。

「路上ライブをやってみないか？」と大津君に誘われたのである。荒太はライブというと中学時代に文化祭で一度やったきりであった。その時は誰もが知ってるバンドの誰もが知ってる曲を2曲やっただけだがなかなか達成感があった。ちなみに荒太はギターボーカルだった。

荒太は二つ返事で「ぜひやりたい」と答えた。その日から3時半まで授業、4時から6時まで部活、それから夜の街に繰り出してライブという毎日が始まった。ライブはパトスのコピーと荒太のオリジナル曲が中心だった。グループ名は「パルス」にした。もちろんパトスから取ったわけだがグループ名をつけた事自体、自己満だったから特にこだわりはない。

だがライブは自己満では終わらなかった。予想以上にお客さんが集まってくれたのである。特に荒太のオリジナル曲がなかなか好評だったのが嬉しかった。そのうちもっとちゃんとしたライブハウスで本格的にやりたいと思うようになっていた。

「荒太君、なんか本気でプロ目指してみたくない？」荒太は端からそのつもりだったがその想いはより強くなっていた。

第1章－4

話は前後するが深沢先生に初めて会ったのは本入部した翌日の事である。「毎週木曜日に来てくれる事になってるの」と先輩から聞いていた。5月に入り体験入部の期間が終わると改めて先生からの挨拶があった。先生曰く弓道において一番大切なのは「感性」だと言う。美しい物を美しいと感じる心があるかどうかだと。「もちろん最初のうちはなんの事だか分からないとおもうけど」と再三念押していたが新入部員の数は荒太達を含めて男子9人、女子15人。まあ、例年通りといったところらしい。その全員が巻藁テストに合格する頃には荒太は深沢先生から一目置かれる存在になっていた。先生が言うには荒太は実にいい「感性」をもっているらしい。射を見ればそれが分かるのだそうだ。

なるほど弓道をやると感性も磨かれるのか。荒太はそう解釈した。そうしたら音楽をやっていく上でもプラスになるじゃないか。荒太はさらにそう都合よく解釈した。

かと言って的にバンバン当てまくっていたわけではない。なるほど感性と的中率は関係ないのか。荒太はそう解釈した。逆に敦也はバンバン当てまくっていた。敦也の感性はどのような物なのかと思ったが考えてみれば中学時代から全国に行った事もあるほどの実力者なのだ。初心者の荒太とは根本的に違って当然だ。努力しないでもそれなりの結果を残すより、努力してそれなり以上の結果を出すほうが断然かっこいい。敦也はヒーローの素質十分なのである。

しかし充実した日々は唐突に終わりを向かえる。ある日、比奈子が1人の男子部員を射殺してしまったのである。

第2章ー1

第2章

1

「でもさあ、荒太とは割りにメールやら電話やらしてたからあんまり久しぶりって感じしないんだよな」唐突に身も蓋もない事を言い出す敦也

「そりゃあ、まあな。てか、お前、さっき俺が銀髪にしてた事、驚いてたけど一回写メ送った事あったよな」荒太もまた冷静に対応する。

「生でみると余計に驚くんだよ」まあ、そんなもんか。

「ところでさあ、お前と蓮井さんて付き合ってたの？」

「いや、付き合ってはいなかったよ。というか『付き合う』の定義がよくー。毎朝一緒に登校するのは付き合ってるって言う？」

「言うね」

「2人で映画観に行くのは？」

「言うね」

「バレンタインにチョコもらうのは？」

「確実に付き合ってるね」

「でも義理だったかも」

「手作りだったか？」

「ああ、手作りだったな」

「確実に本命だね」

「というか2人共ね」深沢先生が割り込んできた。

「お互いに好き合ってればそれでいいんだよ。形なんて関係ない」

若干、古臭いが含蓄のある言葉！

　そんなこんなで目的の霊園に到着した。「お金は？」「いいよ。私が払うよ。教え子と割り勘てわけにもいかんだろ」そう言って3

人はタクシーから降りた。
「どっちからにする？蓮井さんからか？」敦也がそう聞いた。「というか俺はどこまで踏み込んでいいのかな？荒太にとってどこまで忘れたい事なのかなって」遠慮がちに聞かれたがそれは荒太にとっても実に微妙な質問だった。
上園明―それは部活中の事故で比奈子が死なせてしまった男である。射場に現れた蜂に怯えて矢道―矢の飛ぶ道、すなわち矢を射る場所から的のある場所の事である―に飛び出してしまった大バカヤローである。そこにまさに一瞬の間に比奈子の矢が飛んできたのだ。運が悪かったとしか言い様がないが矢は上園の心臓を貫いた。即死である。本当に上園は大バカヤローだ。死んだ人を悪くは言えないが上園一人の死がどれほど多くの人間を不幸にしたか、それを思うと誰かを憎んでいないと荒太は壊れてしまいそうだった。
「俺はあの蜂を恨む事にしてるよ。それが一番いいと思って」敦也はそう言った。確かにそれも一つの手だ。
事故があったのは高2の夏合宿が終わってすぐの事。先輩達も引退してやっとそれぞれ自分なりの弓道というものを見つけ始めた頃である。荒太は部長になっていた。根が真面目だったからだろうがいわゆるキャプテン的な存在ではない。どちらかと言うと事務的な作業を任される面倒な役回りだった。それも短い間だったが。
幾度の話し合いの末、弓道部は無期限の活動停止という事になった。敦也や滝川さんなどは続けさせて欲しいと直訴したのだが死人が出てしまった以上、学校としても受け入れるわけにはいかなかった。仕方のない話である。
比奈子が死んだのは事故から半年後、2月の終わり頃だった。近所の公園の木で首を吊っている死んでいるのを帰宅途中のサラリーマンが発見したのである。翌日、全校集会でその事が伝えられたが死因、死亡推定時刻、自殺の理由など警察が調べるような事は全て伏せられた。遺書は残っていなかった。だが罪の意識に耐えられずの決断だったのだろうというのが大方の推測だった。

「比奈子の事は好きだったから—大好きだったから忘れたくない。どうして—どうして死んじまったんだよ・・・比奈子」墓前で手を合わせながら嗚咽交じりの言葉が漏れた。

上園の墓にも手を合わせた。だが荒太は彼になんと言葉をかければよかったのだろう。生前の上園とは特に深い仲ではなかった。「一緒に部活をやっている人」という程度、好きでも嫌いでもなかった。

「こいつにも家族がいて友達がいたんだよなって思うんだよ。その人達は比奈子の事をどう思ってたのかな」荒太は誰に聞くという風でもなくつぶやいた。

敦也も先生も答えなかった。比奈子自身は恨まれていたと思っていたのかもしれない。だが上園の葬儀に参列した比奈子の両親に対して上園の両親は「全く恨んでない」と断言してくれたそうだ。逆もまた然り、比奈子の両親も上園に対して贖罪の念こそあれ全く恨んではいないと断言した。

「さあ、そろそろ行きましょう。6時からですよ」敦也が言った。

荒太が北海道に帰ってきた理由は3つある。1つは墓参り、2つ目が同窓会で弓道部一同集まる事になっていたのである。

第2章―2

2

「ところで今日の同窓会って何人くらい来るの？」バスに揺られながら荒太が聞いた。

「後輩と先輩も結構来るから全部で３５人」

「ひょえー」荒太は素っ頓狂な声を出した。「高校卒業して他所行った人も結構いるんだろ？それで３５はすごいな。」

「みんなお前に会いたがってんだぞ。自覚ないとお前、地元じゃそれなりにホープなんだからな」

「アッハッハ」

「アッハッハじゃねえよ」インディーズシーンじゃすげえ人気になってんだろ？これでメジャーデビューでもしてみろ。今日だって『サインもらっとこうかな』とか言う奴、絶対いるぞ」

弓道が出来なくなってから荒太は一層、音楽に打ち込むようになっていた。圭一―その頃には「圭一」と呼ぶようになっていた―と共にメンボサイトでリズム隊を探して４人組のバンドを結成した。バンド名は「エートス」にした。かと言ってこのバンドをパーマネントに続けるつもりはなかった。高校を卒業したら東京に行って音楽の専門学校に入る。そこで本格的にバンドを組んでプロを目指す。エートスはそれまでに経験と実力をつけるためのつなぎのつもりだった。実際、リズム隊のユラとカーキ―本名は最後まで教えてくれなかった―は完全趣味思考だったし普通に下手だった。

それでも荒太のカリスマ性で地元ではなかなかの人気者になっていった。ライブもちゃんとしたライブハウスで出来るまでになっていた。もちろん荒太を動かす活力になっていたのは比奈子の事だった。事故があってからの比奈子は完全に自暴自棄に陥っていた。学校も休みがち―というか完全に不登校になり部屋に閉じこもるようになった。食事もままならず声を押し殺してすすり泣く声を家族は

何度も聞いたという。
　そんな比奈子を元気づけたかった。自分までクヨクヨしてちゃだめだとそう思っていた。それでも比奈子は死んでしまって今度は荒太が自暴自棄になる番だった。学校へ行って帰ってきたら食べて寝るだけの生活が続いた。圭一は荒太がいつ戻ってきてもいいように自分がギターボーカルをやってバンドを継続してくれた。
　バンドには3ヶ月ほどで復帰した。ところがベースのユラとドラムのカーキは受験があるからと次のライブでラストにして欲しいと言い出した。荒太と圭一は渋々納得してかくしてエートスは感動の（？）ラストライブを開催した。荒太は考えた。さて、これからどうしたものか？

第2章－3

「そう言えば雪白高校の弓道部、来年度から活動再開する事になったらしいぞ」先生が他人事のように言った。そう言えばこの方は普段は何をして生活しているんだろう。今更ながら考えてみると結構、謎の存在である。

「あっ、そうなんですか。そりゃあよかった。もう4年ですもんね。」敦也は心から嬉しそうに言った。

「でも敦也って大学では弓道やってないんだろ？」荒太は聞いた。

「いや、一応、入部する事はしたんだけどな。勉強のほうが面白かったんだよね。変な話だけどさ」敦也は自嘲気味にそう言った。

「いや、変ではないだろ。一流の大学行ったんだし。やっぱり一流の会社にでも就職するのか？」荒太はからかい半分で聞いた。

「いや、親父の会社継ぐ事になると思う。それはそれで意外と面白そうなんだ」敦也のお父さんはそこそこ名の知れた玩具会社の社長をやっている。「俺、意外と御曹司だからさ」敦也は自慢臭くない言い方でそう言った。

「お坊ちゃんて柄じゃないけどな」

「誰もお坊ちゃんとは言ってないだろ」敦也は笑った。

「ところで深沢先生はまたコーチやるんですか？」荒太は話を戻した。

「ああ、やらせてもらえる事になったよ。なかなか楽しいんだよ。毎年毎年、いろんな生徒が入部してくるだろ。その一人一人の射の違いを見るのが面白いんだ」

そうこういってるうちに同窓会会場の居酒屋「春さん」に着いた。6時10分、ちょっと遅刻だ。墓参りに時間を掛け過ぎた。絶対泣かないって決めてたんだけどなあ。

「地元の奴らにとってはここは飲み会の定番になってるんだよ。お前は来た事ないだろうな」敦也はドアを開けた。もうほぼ全員集ま

っているように見えた。
「おお、やっと来たぞ。主役が」「てか、すげー髪だな」「銀髪じゃんか」「これがバンドマンのオーラか」「東京行った奴はちがうな」「会いたかったー、会いたかったー（？）」「おい、だれか敦也にも触れてやれよ」「敦也は全く変わってねえな」「先生もお久しぶりです。懐かしいな」・・・エトセトラ。
ほぼ全員が一通り「久しぶり」の挨拶を怒涛の勢いで済ますと荒太は若干、圧倒されつつも返事をした。
「ひ、久しぶりです」
「と、とりあえずどっか座ろうぜ」敦也も若干、戸惑い気味でそう言った。
「おーい、ここ空いてるぜ」そう声を掛けたのは国乙三郎という上園の親友だった男である。名前は「クニオツサブロウ」と読むのだが間の2文字を取って「オッサン」という今思うとかわいそうなあだ名で呼ばれていた男でもある。
「じゃあ、とりあえず俺が行くよ」と敦也がオッサンの隣に座った。
荒太がまわりをキョロキョロしていると「ここ空いてるぞ」と低い声がした。
「あれ？吉行じゃんか。久しぶり。珍しいな。お前が飲み会なんて。学生時代は打ち上げとかほとんど欠席してたのに」荒太が側に歩み寄りながらそう言った。
「なんか飲みたい気分だったんだよ。短大も卒業して今は普通に社会人やってるよ」吉行は「フフン」と笑いながら答えた。
「というか高校時代は一匹狼気取ってたからな。大学ではどうだったんだ？」荒太は笑いながらそう聞いた。
「相変わらずぼっちだったよ。弓道も続けるつもりなかったしサークルも入る気がしなかったからな」吉行は虚しさと寂しさの会い混じった口調でそう言った。荒太はなんだか複雑な気分になった。
ここまでのやり取りではわからないと思うので補足しておくが吉行は女である。吉行一枝が本名。髪をベリーショートにし一見する

と男のようであるが実はなかなか端正な顔立ちをしている。あまり誰とでも親しく接するタイプではなかったがこちらも上園とだけは仲がよかった。上園は目立たない存在だったが類は友を呼ぶという奴で同じように友達の少ない奴からは好かれるタイプだった。
「まあ、お前も飲めよ」
「馬鹿、ボーカリストが酒飲めるか」
「ああ、そうか。お前、音楽の専門学校行ったんだよな。もう卒業したのか？」
「ああ、今はバイトしながら圭一と2人で暮らしてる」
「その頭でよくバイトできるな」
もっともな疑問だがなんの事はない皿洗いである。
「お前がギターボーカルで大津がギターだろ。ベースとドラムはどうしたんだ？」
「専門で探したよ。結構、趣味も性格も合う奴がいてな。演奏も上手かったし」
「バンド名は？」
「『ノクティルカ』英語で夜光虫っていう意味なんだけどな。響きもいいしバンドのイメージとも合うと思ってさ。明るくもあるし暗くもあるだろ」
そこで荒太は野菜スティックに手を伸ばした。普段から少食の荒太は割り勘だといつも損をする。
「今日、比奈子と上園の墓参り行ってきたんだけどな。結構、頻繁に手入れされてる感じだったぞ」
「そりゃあ、家族は頻繁に参ってるだろ。ところでバンドの事なんだけどさ」
「ああ」荒太はなんだか話をはぐらかされたように感じた。
「今のうちにサインもらっとこうかな」誰かしら言うだろうと思ってたがこいつに言われるとは。
「冗談だよ」こいつでも冗談なんて言うのか。
「お前って比奈子と仲良かった？」

「なんだよ、唐突に。まあ、同情はしてるよ。でも死にたいほどつらい思いするくらいなら首吊ったほうがマシだろ。なんとなく想像は出来るよ」

「―」荒太は何か違和感を覚えたがその正体には気付かなかった。

第2章－4

宴は2時間程続いたが荒太は移動する度に質問攻めにあった。ほとんどがバンドの事だ。なるほど荒太は確かに雪白村のホープであるみたいだ。

「ジャンルはどんなのやってんの？」

「基本はハードロックだな。でもいろいろやってるよ。バラードもポップも」

「曲は全部荒太が書いてるんだろ？」

「いや、圭一が作った曲もあるよ」

「どうでもいい話だけど『大津圭一』っていう名前、略すとＯＫだよね？」

「本当にどうでもいい話だな。でも本人それ言われるの結構不快らしいぞ」

そこでまた野菜スティックに手を伸ばす。今日、これとポテトしか食ってないぞ。なんだか食欲がない。また席を移動する事にした。ほとんど立食パーティーと化している。

「荒太君は2次会―いや、3次会か。カラオケは行くの？私、荒太君の生歌、久しぶりに聴いてみたいなあ」生歌聴きたきゃ東京に来い。荒太はそう思ったが口には出さなかった。

「お前、生歌聴きたきゃ東京行くこったな」敦也が割り込んできた。こいつは読心術を使えるのか！

「荒太はカラオケには行かないよ。明日は大事な用があるんだよな」敦也が代わりに答えた。

「なあに？大事な用って」

「玲奈ちゃんに会いに行くんだよ。なんか話したい事があるんだって」荒太は渋々答えた。

「玲奈ちゃん―ってああ、比奈ちゃんの妹の！」久しぶりに聞いた名前だったためかかなり驚いた様子だった。

比奈子には妹がいた。―蓮井玲奈―年は４つ下で今は高校２年生だ。荒太達と同じ雪白高校に通っている。もともと荒太が北海道に帰ってきたのは玲奈ちゃんから「大事な話がある」と電話があったからである。墓参りも同窓会も敦也が帰ってくると聞いて―誰から聞いたのかは謎だが―ついでに企画したものだったわけだ。

「というわけで―」敦也は「ウホン」と咳払いしてから声を張り上げた。「そろそろ時間でーす。みんな金寄越して外出なさーい。２次会は居酒屋『遊味亭』で行いまーす」

荒太は敦也にお金を渡すと早々に店を出た。雪はとっくに止んでいる。

「今日はどこ泊まるつもりなんだ？」

「いや、普通に実家帰るよ」

「あっそうか。お前んちって蓮井さんちの近くなんだよな」

「じゃあ、またどっかで会おうぜ。元気でな」

「イエーイ」

そしてハイタッチで終わる２人。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3055y/

春の足音は鎮魂曲

2011年11月18日03時22分発行